

【校長通信 4月20日号】

箕面自由学園中学校・高等学校
校長 田中 良樹

毎日毎日、罹患者数が増加しています。

いま、顕在化している感染者は、2週間～3週間前に罹患したものとされています。緊急事態宣言が出てからも、「日本は生ぬるい！！」とまだまだ諸外国から見られています。「大学生をはじめとする若年層の外出規制がまだ出来てない」、「出勤している会社員が電車の中で三密を作っている」とか、イライラして誰かに責任追及する世相が広がってきています。「自分こそは正義」「やってはいけないことをしている他人が許せない」と思うと、実は自分も苦しいものです。

まず、自分のできることをやりましょう。自分の命を守り、家族の命を守る。ひいては社会全体を守る。1日でも早く、このパンデミックを終息させるためにです。われわれも自然界の一員にすぎなかったのです。自然界すべてを征服したかのようなおごりがあったのかもしれない。

われわれ人類は、これからコロナと「どう共存共栄していくか」を学ばなければならないのです。

「1日も早く、元の生活に戻りたい」

だれもが切実に望んでいることですが、元の生活に戻れるかどうかは誰にもわかりません。これだけの犠牲を払ったのですから、単に元の生活に戻るだけではなく、元の生活よりもより良い方向へ再構築していくことを考えたいものです。

振り返ってみれば、元の生活が必ずしもすべて良かったわけではありません。いろいろな側面から振り返ってみる。今は「その時間を与えられた」と考えれば、この期間もわれわれの長い人生にとって決して無駄な時間ではないのです。また、無駄な時間にしてはいけないと思います。

今回のパンデミックは、世界中であらゆることで「大きな転換点」となります。われわれがより充実し、満足できる日々の日常とはどんなものか、あらためて考え直す出発点にしましょう。

去る4月15日、本校理科教諭 為季 保孝（ためすえ やすたか）が帰らぬ人となりました。享年35歳でした。

病を患い、長い闘病生活でありました。こんな状況下ですので、お葬式に参列することもままならなかったのですが、彼は死の数か月前、校長室を訪ね、私にこう言いました。

「何か学校の役に立てることないですか？自分の生きた証（あかし）に、残された時間、何か学校の役に立てることをしたいのです。なんでもしますから」

そして、「近々、最期がくることを覚悟しています」と。

私は涙で、何も言えませんでした。最期まで立派な生きざまでした。

私たちは、大切な大切な仲間を失ってしまいました。

不自由な日々が続いています。

新型コロナ罹患による死亡者数も増加の一途です。

自分の命は、自分でしか守れません。

コロナを遠ざけることはもちろんのこと、自分で、自分の心、体のバランスを保つ。

そして、「人のために役立つ！！」

われわれ箕面自由学園の教職員は、為季保孝先生の志を引き継ぎ、力を合わせてこの難局を乗り切り、生徒たちが笑顔で安全に通える学校を再開したいと強く思います。

まだまだ不自由な生活ですが、「今」を楽しみましょう。私たち教職員も頑張ります。